第14回東海北陸重症心身障害ネットワーク研究会抄録

日時：令和５年９月22日（金）　ハイブリッド開催
メイン会場：国立病院機構医王病院　大会議室
会長：国立病院機構医王病院　院長　石田千穂
司会進行：国立病院機構医王病院　第一小児科医長　丸箸圭子

一般演題１

座長　医王病院　師長　藤本悦子
療育指導室長　桑原啓史

１．コロナ禍で生じた重症心身障害病棟の生活環境の変化について考える

○伊藤良，古川路乃，中山由美子，池田真由美
北陸病院　療育指導科

【目的】コロナ禍の経験をもとに，今後の生活環境をどのように整えていけばよいか考える．【対象】北陸病院西１階病棟．【方法】療育活動，行事，面会，外出･外泊について，「コロナ前」「コロナ禍」「現在」でどのように変化したかを比較･検討する．【結果】療育活動は，集団の人数制限や感染防止対策を講じながら継続・再開できた．行事は，外出行事は再開できないが，外部社会資源を活用して充実をはかった．面会は，リモート面会を導入したり直接面会も時間制限等を設けながら再開した．外出・外泊は未だ再開できない現状である．【結論】院内活動や面会は再開できたが，院外活動や外出・外泊は再開できず，院外での感染リスクや動きの多い患者さんの感染リスクが高いためと思われる．今後は，WEBコンテンツを導入する等して，家族や外部との更なる交流をはかりたい．

２．全盲で強度行動障害の患者に対して詳細な生活スケジュール告知が有用であった一例

○千田亜矢子，松浦まどか，河原彩，
田本奈津恵，芝山和則
七尾病院　１階病棟

【はじめに】全盲で強度行動障害の患者に対して詳細な生活スケジュール告知を通じて生活リズム調整を行い，改善を認めたため報告する．【症例】60代　男性　脳性麻痺　COVID-19感染により，自室から出られない行動制限が生じ，自傷行為，大声を出す，壁を叩く行為が増加し，睡眠時間が減少した．そのため１日の生活スケジュールを詳細に言葉で伝える関わりを実施し，その効果を強度行動障害判定基準を用い，介入前，４週後，８週後で評価した．介入により，自傷行為，大声を出す，壁を叩く，徘徊については有意に減少し，睡眠時間は有意に増加した．【結語】詳細な生活スケジュール告知を通じて触れ合う機会を増やしたことが有用であった．

３．特別支援学校卒業後の問題行動減少への取り組み

○田島優花，前田康子，道仙まどか，
田村彩珠，浅井由加理，佐野静香
東名古屋病院　北１階病棟

【目的】自傷行為，問題行動減少への試み．【事例】10代後半　カントレル症候群　歩行・指示理解可　特別支援学校卒業を機に，自傷行為，脱衣，不潔行為などの問題行動が増えた．【方法】多職種で関わる時間を増やしたが，卒業前同等の時間確保には至らなかった．高柵ベッドで過ごす時間が増えたため，身体拘束の観点から多職種で検討を行った．【結果】多職種による検討の結果，寄り添い，想い・考えを汲み取ることの大切さを再認識しスタッフの行動変容へと繋がった．結果，ベッド外で過ごす時間増加につながり，問題行動は減少しなかったが，自傷行為は減少した．【結論】問題行動がある患者の生活の質を向上させるためには，安全な環境の提供と多職種との連携が不可欠である．

４．演題名：脱衣行動のある患者に対する看護師の対応方法の検討－ペアレントトレーニングの手法を用いて－

○西川千尋，住田清美，角内美鈴
石川病院　アカシア病棟

【目的】脱衣行動のある患者に対しペアレントトレーニング（以下PTと略す）をもとに，看護師の対応方法を明らかにし，PT手法を用いた関わりを実践することで課題を見つけ，支援の方向性を検討する．【対象】Ａ氏　32歳　女性　知的障害　発達年齢　１歳１カ月．【方法】Ａ氏に対する関わり方（脱衣行動時の対応とほめ方）についてアンケート調査した．Ａ氏の状態は看護記録から情報収集した．【結果】①脱衣行動については否定的注目をしている．②「評価」「尊敬」「感謝」「感心」のほめ言葉を使用．③非言語的な関わりが少ない．④Ａ氏の脱衣行動の低減はなかったが睡眠状態の改善，尿失禁の減少があった．【結論】①PT手法について知識・技術を高める必要性がある．②非言語的な関わりが不足している．

５．重症心身障害児者への手術前のプレパレーションの実践報告

○田中杏奈，井上翔太
長良医療センター　A棟３階病棟

【目的】重症心身障害児者に対して治療や検査を行う際に，プレパレーションを実施してその効果を検証する．【症例（あるいは事例）】手術前の重症心身障害者の40代男性へのプレパレーションの実践．【方法】看護記録よりA氏の経過と現状の情報収集し，手術前プレパレーションを実践する．A氏のプレパレーション前後での，治療の説明に対して反応の変化を検証する．【結果】プレパレーションの実践により，手術に関する問いかけに目線を合わせて声を出す反応が見られた．手術後の検査や処置に対して協力的な様子が見られることがあった．【結論】プレパレーション後では手術への理解を示すような表現が認められた．発達年齢に適した方法での事前説明が重要であることが示唆された．今後の重症心身障害児者への関わりに生かしていく．

６．重症心身障害（者）の看取りを経験して「その人らしさを大切にした」関わりの振り返り

○名川明希，谷口あゆみ，大内田有香，梅本卓己
鈴鹿病院　東２階病棟

【目的】重症児の高齢化に伴い病棟で看取りの機会が増えた．その人らしさを大切にした看取りの１事例について考察し今後の看取りにつなげる．【事例】50代女性．脳性麻痺．出生時問題なし．生後３カ月時に40度の発熱，痙攣，意識障害発症．生後４カ月時にてんかん発症．３歳時に脳生検実施，脳委縮が認められた．９歳で母親の育児困難あり当院に入院．2021年１月食事摂取困難，脱水となりNGチューブ挿入，経管栄養開始．2021年３月家族に見守られ死亡退院．【方法】病棟スタッフとの関わりや日々の過ごし方，療育での様子，家族との関わり，家族の看取り時の希望，状態悪化時の関わりを記録をもとに看取りの場面を振り返り，考察していく．【結果】日々の関わりや家族とのコミュニケーションから得られた情報の一つ一つがその人らしい看取りに繋がっている．【結論】日々の関わり，看護からその人らしさとはなにかを理解しようとし続けたことで，言語的に訴えの無い重症児でも，最期の瞬間までその人らしく生き抜く看取りの援助が可能である．

一般演題２

座長　医王病院　第二小児科医長　脇坂晃子
主任医療社会事業専門員　中本富美

７．水頭症を持つ児の意思伝達能力獲得へ向けた多職種での関わり

○三輪明日香，川西瑞希，稲吉瑠美，村田博昭
三重病院　５病棟

【目的】乳児期から気管切開をしているため言語表現が出来ないが表情や動作での感情表出がある児のQOL向上のため多職種で連携し意志伝達能力の獲得を目指す．【事例】10代男児　骨形成不全，水頭症　言語や認知の発達は生後６か月程度．【方法】指さし法．【結果】多職種で目標を共有した後，専門性を活かし児の状態に合わせて座位や注視の習得，物の意味の学習や指で示すことなど児の発達に応じて段階的に言語の理解能力獲得に取り組むことで児は実物や写真を見て２つの物から１つ選択できるようになった．さらに好きな動作に対し自分から指し示すなど意思伝達が可能になった．【結論】多職種で目標を統一し，多方面から継続した関わりを行うことが児の意志伝達能力の獲得へ進んでいる．

８．手足の動きが活発になった重症心身障害児の短期入所受け入れ体制を整える

○桑原千尋，増田志伸，丸箸圭子
医王病院　７病棟

【目的】手足の動きが活発になった重症心身障害児の短期入所受け入れ体制変更の前後を比較し評価する．【対象】2022年４月から2023年８月の期間にA病棟で短期入所を利用した患者15名．うち４名は５歳以下，且つ手足の動きが活発になった患者．【方法】インシデント報告および看護記録等から患者の状態等が記載されているものを抽出し後方視的に振り返る．【結果】2023年４月のインシデントは手足の動きが活発になった低年齢児のチューブ関連４件だった．ベッドサイドで家族と患者を観察，情報収集し気管切開管理等の項目を追加した．2023年５月から８月に手足の動きが活発になった重症心身障害児によるインシデントはなかった．【結論】手足の動きが活発になった重症心身障害児の短期入所ではベッドサイドで家族と情報共有することで患者の運動機能をアセスメントしリスク発生の予防に繋がることが示唆された．

９．Post NICU 病床での対応を必要とした低年齢在宅重症心身障害児のソーシャルワーク実践

○中神麻世，金森あすか，江尻真理子
富山病院　地域医療連携室

【事例】人工呼吸器装着・頻回な吸痰処置・胃瘻管理などを必要とする在宅療養中の18トリソミーの３歳未満児で，当院の短期入所利用を希望した２事例．２事例ともに母親が本児の弟妹の出産の為，出産前後での月単位の短期入所を希望した．【結果】２事例とも弟妹の出産前後に短期入所を利用することができた．【結論】重い医療的ケアを必要とする低年齢児の短期入所利用は当院に10床ある Post NICU 病床での対応を要し，院内外の調整がとても重要となった．家族が安心して出産を迎え，出産後，家族が安定した中，患者自体も安心して自宅に帰ることができるように調整することが大切になる．

10. Post NICU 重症児受け入れに必要な院内調整

○坪井香緒里，寺下新太郎，岡部美恵，金兼千春
富山病院　小児科

【目的】在宅用人工呼吸器の普及や在宅移行を推進する政策等を背景に，重症児の在宅移行が進んでいる．一方で次子出産や就業といった家族のニーズも多様化し，長期（月単位）や頻回（毎週月・水・金曜日等）の短期入所の需要が高まっている．短期入所受け入れ時の医療上の問題点や必要な院内調整について検討する．【症例】18トリソミーの4歳女児．【結果】当院の在宅用人工呼吸器はTrilogyのみであったが，新規にVivoを導入し，普段の人工呼吸から変更することなく短期入所の受け入れを可能とした．新規導入に際し，複数回の院内研修等の準備を要した．【結論】Post NICU児は複数の合併症を抱え，多様性が大きく，画一的な管理は不可能である．高まる需要への対応として，複数種の人工呼吸器導入といった取り組みが有効である．

特別講演

座長　医王病院　名誉院長　駒井清暢

胎児治療と出生前診断と生命倫理

国立成育医療研究センター遺伝診療センター長　左合治彦